

## 4 厚木市文化会館

鑑賞教室から演劇出前  
ワークショップへ

### 1. ホールの概要

- 開館年： 1978年  
運営母体： 厚木市  
都市人口： 21万7千人
- 施設全体の延床面積： 11,179m<sup>2</sup>
- 大ホール： 1,400席  
小ホール： 376席  
リハ-サル室・練習室：4室 / 約775m<sup>2</sup>  
(含む展示室、集会室)
- 管理時間： 9:00 ~ 21:30  
休館日： 火曜、年末年始
- 運営スタッフ総数： 9名 (非常勤含)  
企画系スタッフ数： 2名  
芸術普及担当者： 兼務  
(企画系スタッフ数、芸術普及担当者数は内数)
- 所在地・連絡先：  
〒243-0032 厚木市恩名295-1  
tel. 046-225-2588  
fax. 046-223-1439  
URL : <http://www.city.atsugi.kanagawa.jp/>

### 2. ホールの特色、事業概要

- 目的：神奈川県央の文化の殿堂として、また市民の文化・芸術活動の拠点として、催し物や集会などの幅広い活用を目的として設立
- 自主事業数： 30本。(1999年度)
- 主な自主事業(1999年度、後述の芸術普及活動を除く)
  - アナトール・ウゴルスキ ピアノリサイタル
  - ダリス・スコラーズ
  - 松竹大歌舞伎
  - さだまさしコンサート
  - 東儀秀樹コンサート
  - 東京フィル・クラシックスペシャル

● シギスバルト・フィケン - バッハソロ  
等

- ホール稼働率： 大ホール：63.2%  
小ホール：83.5%
- 自主事業予算： 6,806万円  
芸術普及予算： 610万円  
(上記自主事業予算の内数)

### 3. 芸術普及活動導入の背景、経緯

- 厚木市文化会館設立以前、厚木市には県立の多目的ホールが一つあるだけで、市民の文化活動が低調だったが、文化会館のオープンに合わせる形で、市民オーケストラ、吹奏楽団、児童合唱団、女声コーラスなどが産声をあげた。
- 開館以来、「良いものを安く、居ながらにして楽しむ事ができるように」をモットーに、中央の文化を継続して招致し、優れた音楽、舞台芸術などを中心に、自主事業を展開している。
- 82年には小ホールと展示室を増設し、学校に向けた鑑賞事業に取り組み始めた。まず、厚木市内に残る淡路系の人形芝居「相模人形芝居」の公演を、中学校向けの鑑賞事業として開始。
- 85年から、子どもに優れた舞台を見せようと文化会館、教育委員会、子ども会とのタイアップで芸術鑑賞会を企画。三者がそれぞれ経費の三分の一を負担する形式で、現在まで継続している。  
\*表参照(厚木市少年少女芸術鑑賞会)
- 94年からは、市内の子どもをオーディションで選んでミュージカルを制作。4年間継続し、市民参加型事業としたが、開館20周年を節目に従来の公演や市民参加のあり方の見直しを行った。
- 文化会館は厚木市の直営館。人事異動があるため、担当者ベースでノウハウの蓄積ができないことが課題である一方、予算的な面では大きな減少はなく、直営のメリットも多い。

\*1:横内謙介氏のコメントから:

- ・ワークショップを行うことの意味は、将来の観客づくり。そのためにも、ワークショップをやりっぱなしではなく、次のステップとして、子どもたちがいつでも会館に来ることができるよう、質の高い「子どもの芝居」を用意したい。
- ・演劇人がワークショップに携わるに関しては、「自分の芝居をあらためて見つめ直すこと」と「仕事として」という2つの軸があると考えている。劇団の維持のために劇団の持っている技術を使う仕事がワークショップ事業だと考えている。
- ・よくワークショップのための人材がいけないと言われるが、ちょっと周りを見渡せば、ファシリテーターは地域にいる。行政と地域のアーティストがもっと関わりを持って、お互いできることを分担したらよい。
- ・ワークショップで学校に行くときは、あくまで演劇のプロとして行くのであり、決して先生にならないようにしている。このスタンスが、うまくいっている秘訣かもしれない。

#### 4. 芸術普及活動の内容と運営

##### ◎ 芸術普及活動の構成と内容

- 鑑賞型事業の「厚木市少年少女芸術鑑賞会」に加え、開館20周年の98年から99年にかけて、市民の手によるレベルの高い舞台芸術の創造を新たな目的に、以下の4つの事業をスタート。

- 「厚木シティバレエ」:子どもたちとプロの舞踊家、市民オーケストラで舞台を創造するプログラム。出演者はオーディションで選ばれた市民が中心。オーケストラは地元のアマチュアオーケストラ「厚木交響楽団」が担当、重要なパートにはプロが加わり、芸術監督と指揮者、地元舞踊家の指導のもとで、質の高い作品づくりを目指す。
- 「厚木シアタープロジェクト」:劇作家で劇団扉座を主宰している横内謙介氏と文化会館、市民応援団の3者で展開しているプログラム。文化会館で扉座の公演(2000年度は「アゲイン - 怪人20面相の優しい夜」(6ステージ)、「ホテルカリフォルニア ~ 私戯曲県立厚木高校物語」(4ステージ)を実施した)を行うほか、シアタートーク、演劇体験講座、演劇出前ワークショップ(\*表参照)等演劇を中心とする多様な事業を展開。
- 「厚木市文化会館ジュニアコーラス」:21世紀の音楽活動の中核となって活躍する人材を育成するプログラム。子どもに音楽の基本を身につけさせ、将来的な指導者になれるような人材育成が目的。\*表参照
- 「ハーモニカの街あつぎプロジェクト」:厚木市を世界のハーモニカのメッカにすることを目的としたプログラム。市内公民館で講座を開講。

##### ◎ 「厚木シアタープロジェクト」による学校へのアウトリーチ活動

- 子どもが演劇に触れる機会をつくり、将来的な演劇ファンを育てることを目標とし、劇団扉座による出前ワークショップ、劇団扉座の本公演(厚木市文化会館小ホール)、劇団扉座主宰・横内謙介氏(\*1)の講演会から構成される事業。
- 厚木シアタープロジェクトの演劇出前ワークショップは、小学校の一学年を対象に、授業時間2コマを使って体育館で演劇の授業を実施する。
- 昨年度(99年度)は、初年度ということもあり、対象学年を絞らずに実施したが、低学年では、想像力や表現力の部分でプログラムの内容に追いついていけない部分があること、授業2コマ分に集中することができないことなどから、本年度は、小学校5・6年生を対象を絞っている。
- 事業の実施にあたっては、事前に教育長に相談のうえ、教職員課にも許可を得て、校長会に出向き説明した。前例のない新しい事業を始めるときには、調整に手間取らないためにもトップダウン形式が有効。
- シアタープロジェクトの実施にあたっては、事前に市長と横内氏が会談する機会を設け、市役所の定例記者会見で事業を発表した。記者会見の結果、新聞各紙で取り上げられ、マスコミを経由して役所内にも情報が伝わり、外からの評判でプロジェクトが認知された。
- 初年度は学校側も手探りという感じだったが、先生方から、ワークショップに参加している子どもたちの顔がとても生き生きとしていると評判がよい。
- 学校との事前の擦りあわせとして、会館で横内氏の「子どものための演劇ワークショップ」を見学してもらい、横内氏からワークショップ実施に際しての考えを直接伝えてもらった。
- 事業の意図を理解してもらうことは、学校とスムーズに事業を行うために必須。

◎ 主な芸術普及事業の概要

事業の名称(開始年度)	事業の内容(実績は1999年度)、課題や今後の展望				
厚木シアタープロジェクト～演劇出前ワークショップ (1999年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学校5・6年生を対象に小学校の体育館に出向いての演劇体験教室。3年間かけて市立小学校23校すべてへの出前を目指す。99年度は6校(2000年度は8校実施予定)で実施。</li> <li>指導は、劇作家で劇団扉座を主宰する横内謙介氏と劇団員9名。</li> <li>授業時間を2時間もらい、前半:「音を聞いて想像してみよう」-30分、後半:「さよなら先生」(短い台本を元に実際に演じてみる)-80分。後半は、1グループ10名程度に分けて、劇団員が先生になり、台本を読むことから演じることまで一通り体験し、最後に各グループの発表を行う。</li> <li>事業は会館の事業の予算枠の中で実施。横内氏の企画・指導料、劇団員に支払う補助人件費、音響費等として劇団扉座に支払いをしている。</li> <li>学校側からは低学年もと要望があるが、横内氏が多忙のこともあり、十分ニーズに応じられない。また、現在はきっかけづくりのみとなっており、いかに継続していくかが今後の課題。</li> </ul>				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	小学校	1回約80名	不定期	無料	130万円
厚木市少年少女芸術鑑賞会 (1985年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>厚木市文化会館、教育委員会、厚木市子ども会連絡育成協議会の共催で、優れた舞台芸術の鑑賞を通して、明日を担う厚木の子どもの情操を養い、心豊かな人間形成を目指す。</li> <li>2000年度は「読売日響オーケストラファンタジー」を開催(2ステージ)。</li> <li>子ども会によるチケットの販売数が落ち込んでおり、動員数が減っている。子ども会だけではなく、地域のさまざまな組織との連携が必要。</li> </ul>				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	小学生・中学生・親子	1,800名	年1回	¥1,000	400万円
厚木市文化会館ジュニアコーラス (1999年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>合唱活動をとおして、感性豊かで思いやりのある心を持った子どもを育成するとともに、学校においては、合唱活動のリーダーとして、また21世紀の厚木市の芸術文化活動のリーダーとしての養成を目的とする。</li> <li>小学校4年生から高校生を対象に、歌うことの楽しさ、合唱音楽を創造する喜びを体験させる。声楽家・清澤伊知子氏の指導を受ける。</li> <li>アンサンブル重視で、アカペラ曲の練習を基本にしている。</li> <li>活動範囲が広がるにつれ、資金も必要になってくるので、継続的に支援するサポート組織、行政・民間が共に支援できる体制が必要。</li> <li>発足1年で「全日本ジュニアコーラス・フェスティバル」で「あおぞら賞」を受賞。神奈川県を代表する新しいタイプの合唱団に育てていきたい。</li> </ul>				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	小学校4年～高校生	49名	週1回程度	¥2,000(1ヶ月)	80万円

「演劇出前ワークショップ」風景



- 会館の事業として派遣されているため、学校側に外部の人が入ることへの不安はない。厚木市も含め、社会全体の流れとして、総合的な学習の時間などで、地元の工芸家などを呼んで授業をする機会も増えているので、外部の専門家を授業に活用することに抵抗はなくなってきている。
  - アウトリーチの「アウト」の部分だけにしないためにも、同プロジェクトでは、劇団扉座の芝居を本公演として会館で行うなど、会館内での事業に結び付けている。
  - このシアタープロジェクトは、3年たった時点で一旦再評価を行う予定。シアタープロジェクトの次のステージは、子どもたちに安くていい演劇を見せること。
- ◎ アーティストとの連携
- 「厚木シアタープロジェクト」の学校へのお出前ワークショップの内容は横内氏のオリジナル。横内氏は、地元の厚木高校の演劇部に所属していたことから、今でも厚木市と関わりが深い。会館では、横内氏主宰の劇団扉座の公演、演劇体験講座として子どもや高齢者を対象とした演劇ワークショップをお願いしている。
  - 今までの連携があるため、学校へのお出前ワークショップも、安心してまかせられる。
  - 厚木シアタープロジェクトをはじめ、ハーモニカ、コーラス、バレエ等のプログラムでは、すべて地元に住居する(または関わりのある)力のあるアーティストの指導を仰いでいる。
  - ホールの機能を活かしたプログラムとして、アマチュアによるオーケストラコンサート等も実施するが、積極的に地元に住居するプロのアーティストと連携していきたい。プロの意識は、アマチュアにも非常にいい影響を与える。
- ◎ 市民応援団との関わり
- 横内氏を応援したいという市民が応援団をつ
- っている。この市民応援団には、会館としての公式の位置づけはなく、他の事業には関わっていないが、市民応援団では厚木での他の文化活動も支援したいという意向を持っている。いずれNPOになればさらに可能性が広がる。
- 市民応援団の仕事は、春・秋の会館での公演チケットの販売(3分の1)、劇団員と連携した宣伝活動、資金の提供、の3つ。
  - メンバーは約50人(うち実際に活動しているのは10~15人)、団塊の世代が中心で、職業は会社員から自営業までさまざま。
  - 将来的には、NPO、アーティスト、会館の3者での運営体制も考えている。社会の動向としても、財団化ではなく、外部組織との連携という方向は可能性が大きい。予算の面も含めて市の直営であることのメリットも大きいので、会館職員の人材面での問題が外との連携によってカバーできれば、会館事業の幅が広がる。
  - 今後、市民応援団によるシアタープロジェクトの運営も視野に入れている。その際には、厚木市外からの希望にも対応していきたい。
  - ひとつの劇団に予算を支出し続けるのは難しいこと、行政説明責任が大きな課題となっていることなどから、NPOによる民間主導に行政がバックアップする形が実現できれば、事業運営も楽にできる。
- ◎ その他のアウトリーチ活動
- 厚木市は、著名なハーモニカ指導者(全日本ハーモニカ連盟特別顧問、岩崎重昭氏)が在住しており、知る人ぞ知るハーモニカのメッカであることから、公民館と連携して、ハーモニカによるまちづくりを推進している。
  - この事業は、公民館との連携事業。受講生を公民館で募集し、市内10ヶ所の公民館で講座を開講している。講座が終わると自主サークルという形で活動を続けているグループも多い。ハ

---

ーモニカは、高齢者も取り組みやすいことから、高齢者の生き甲斐対策として、市長も前向きに取り組んでいる。予算は会館持ち。

- 公民館との連携に際しては、市長にあらかじめ承認を取り付けたうえで生涯学習部と事前に話し合いを行った。

## 5. 芸術普及活動の効果、今後の課題と展望

### ◎ 課題と今後の展望

- 現在の公共ホール全般をみると、興行主体のホールが多すぎる感がある。文化会館全般として、もっと、「手間ひまをかけてつくること」に取り組む必要がある。また、コーラスや演劇といった舞台だけでなく、活動を支える人を作り出すのもホールの役目。
- 文化に関わる土壌を作り上げるには、ホールの孤軍奮闘では限界があるので、活動を継続させるためにも、周辺の地域全体を変えていかなければならない。しかし、近隣ホールとの連携は、芸術普及活動に係る職員のオーバーワークにつながる恐れもあり、難しいのが現状。
- 厚木は東京に近く、いいものを観ようと思えば東京でいつでも鑑賞ができるため、文化に対してハングリーではない。何を仕掛けても、市民があまり乗ってこないことが厚木の最大の課題であり、それを克服するためにも、芸術普及活動は重要。